

モンゴル外交私記－北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第6回）

元在モンゴル日本国大使
元NEANET会長
花田 磨公

5. モンゴルとの外交関係樹立の顛末記（1）

両国外務省員が直接向き合う

昨2020年暮れに、モンゴル外務省OBの回想集第11集に外国の外交官として初めて執筆を依頼され、外交関係樹立の交渉にいたる経緯について、しばらくぶりのモンゴル語で原稿執筆しました。けっこうな分量でしたので、日本語にもしておきたいと思っていました。その矢先、来年(2022年)2月の日本モンゴル外交関係樹立50周年にあたり、モンゴルの友好団体が記念出版をするというので、かなり長いその続きを執筆しました。やはり長すぎたのか、字数無制限との話でしたが、一部カットされました。ところがカットされた部分は、執筆者としてはカットして欲しくない部分がほとんどであり、カットされた部分は社会主義時代だったらカットされるだろうと思われるところがほとんどでしたので、もしかしたら、民主化30年経ても、感覚は変わらないものかと興味深かったと同時に極めて残念に思いました。他方監修して下さったモンゴル・アカデミーの先生から、多分史学者として真実を重視する立場からか、日本語で是非執筆刊行するよう勧められました。そこで、シリーズを再開させていただくことにしました。このような機会を再びいただき感謝しています。

外交関係樹立の顛末を取り急ぎ書いてご報告しようと思います。残念ながら、日本、モンゴル双方で、当事者でありその間の経緯を、最初から通してフォローしている唯一の人間になってしまいました。この記録はこれまで当然なされてしかるべきことなので、ひとえに私の怠惰に起因しております。モンゴル日本関係は「世界史の大きなながれからすれば無視しえる部分」とモンゴル語科出身の先輩や奉職先の同僚を含めて、耳たこになるほど言われてきましたが、モンゴルと私、そして多分北東アジアにとっては大事な記憶すべき歴史だと思えます。

1972年2月24日日本とモンゴルは簡単なプレスリリースを発表しただけで外交関係を樹立しました。「行取り」つまり行政取極だけで外交関係を樹立しました。そしてその年の9月29日、日中国交正常化も果たしました。外務省の中国課は半年ちょっとの間にアジアの二カ国と関係正常化の事務をしたのでした。私自身は日本モンゴル間の外交関係樹立交渉に従事してきましたが、最後の外交関係樹立の瞬間の事務にはタッチできませんでした。私はその年の7月まで香港で日中関係を岡田総領事直属で1人で担当していたからです。中国とモンゴルと二カ国との国交正常化が行われたことの悲劇でした。

日本モンゴル間で外交関係樹立が大詰めになった1971年12月本省から私を呼び返す打診が岡田総領事のところにあったことを後で知りました。総領事は日中問題が急進展しつつあることを理由に私の帰国を拒否されたと伺いました。こう書くといかにも私が重要人

物であるかのようですが、私の推理ではまったくそうではなく、岡田総領事は日中国交正常化に重要な役を香港で果たされてましたが、多分並みいる中国専門家から交渉が中国関係者に万一漏れるのを恐れ、中国関係者とのお付き合いもほとんどない門外漢の私を手下にして1人でことを進めたかったのではないかと思います。私から中国関係者にことが漏れる心配はないとふんだのだと思いますし、その点では総領事の思惑どおりだったと思います。

2月にモンゴルとの外交関係が樹立されましたので、新関中ソ大使が初代モンゴル大使を兼任され、モンゴルに信任状を奉呈するため訪問することになりました。その事務をすすめるために7月末に本省勤務に異動しました。ことはすでに切羽詰まっております、新関大使への訓令が通常の外交行囊便、いわゆるクーリエ便では間に合わなくなっていました。中国課は日中国交正常化の事務で手一杯だったのだと思います。帰国するなり橋本怒課長がおっしゃいました。「ハナ、俺はいま中国で忙しい。モンゴルの外交関係樹立にともなう事務はお前1人でやれ、まかせるから。おれはめくらサインするから。けして穴を空けるなよ。失敗しておれを地獄につれていくなよ。」（不都合な言葉も記憶のまま）と言われました。外務省は私の入省時にすでにハンコでなくサインでした。今、世の中がやっと外務省に追いついてきたと理解しています。

中国課はてんでこ舞いで、私も日中関係に時にかり出されました。台湾駐在伊藤代理大使御帰国のときの出迎え補佐、乾杯用日本酒猪口の手配、官邸への直通回線番などの雑用をいたしました。

ここで今日の本題に入りたいと思います。両国の外交関係樹立の交渉のきっかけについてです。1957年5月モスクワにおいて調印されたモンゴル・ソ連共同声明において、「モンゴル人民共和国と日本国との両国関係正常化問題につき日本政府と交渉に入る用意がある」と表明されました。モンゴルが日本との外交関係樹立にソ連（ロシア）も同意していると日本側に理解されました。

1961年モンゴルが国連加盟をする直前、各国がモンゴルとの外交関係樹立を模索するなか、日本も当時の国際情勢等を勘案して、モンゴルとの外交関係樹立を探ることとなりました。ちょうど中ソ（ソはソ連）対立が顕在化してくるなかで、中ソ両国のみと国境を接している（ロシアと3543km、中国と4709.6km）モンゴルは、中ソのオブザーベーションポストとしての価値に注目されたわけです。

他方国際政治学者オーウェン・ラティモアにより、モンゴルは旧ソ連の衛星国とのレッテルを貼られていまして、その国際的地位が疑問視されていたのも事実でした。外務省は駐オランダの武藤書記官、駐ソ連の秋保書記官を1961年9月（モンゴルの国連加盟直前）現地に派遣しました。目的は現地調査、日本人墓地の現状視察、外交関係樹立交渉を見据えた初歩的接触などだったと思います。ところが、モンゴル側は彼らを終始単なるツーリストとして応対し、政府関係者との接触交流もなく、墓参も許可しませんでした。失望した日本側は、その後モンゴル問題を放置し、熱心だった幹部も異動で散っていきました。モンゴル問題を事務官として他の任務と同時に担当していた崎山さんも1964年タイ国に二等書記官として赴任されて行きました。特別研究員から省員に私が任官すると同時でした。

私は、東京外国語大学のモンゴル科を卒業し、モンゴル学者になるつもりを主任教授に

無理矢理外務省につれてこられたので、モンゴル関係の打開だけが目的、生きがいで勤務しており、外務省の他の機能にはまったく関心がありませんでした。大きな商店の軒先をかりてモンゴル商売しているような感覚で、なんとか幹部にモンゴルについて関心をもってもらおうと、我田引水の毎日でした。関係促進で何かやりたくても、関係部署説得、幹部説得で無駄な労力を浪費していました。人間関係の構築には細心の注意をはらいました。外務省に入ってモンゴル担当になったのではなく、なんとかモンゴル関係を打開せんと外務省に入ったので、大変気を使っていました。

後に JICA の総裁になられた藤田公郎さんという上司が総務班長になられ、その下に田島高志総務事務官（後駐カナダ大使）がおられ、ともにモンゴルのよき理解者となって下さいました。藤田班長はご自宅のパーティにお招きいただいたり、のちのち他の部署に異動されても対モンゴル外交に助力してくださいました。橋本恕課長、小倉一夫首席など中国課の課長や幹部の中にはモンゴルを応援してくださった方方がかなりおられました。

前記のように 1961 年以降、モンゴルとの交渉は沙汰済みとなっていました。もちろん、出先での応酬や、民間の交流などはありませんでした。しかし、かんじんの国家としての交渉は冬眠状態でした。そんなとき、1965 年の春に先輩の三島事務官が国連局の友人から聞いたが、この夏にモンゴルで国連セミナーがあるそうだ。これはチャンスだから出張したらどうだと知らせてくださいました。まだ外務省になじんでなかった私は出張など思いもよらないので逡巡しておりましたら、君はモンゴルに行きたいと外務省に入ったのではないかと、チャンスはそうあるものではないと背中を押してくださいました。

藤田総務班長の後押しもあり、幹部会に黒板を持ち込み（今思えば冷や汗もの）、多数の幹部を前に、その年から東京外国語大学モンゴル科で講師（1966 年入試の監督などもしました）、外務省に残る意志表示をして、翌年に非常勤に訂正）をしていたこともあり、講義よろしく、モンゴルの地政学上の意味、国際的地位、国内事情などに熱弁を振るいました。私としては自分の出張の成否はともかく、この際外務省幹部にモンゴルについて、とくに日本にとってどのような意味があるかお話をさせていただきました。僭越過ぎるにもほどがありました。

1965 年の私の出張は決まりました。誰と出張するかとなり、私は在タイ大使館の崎山さんにすぐ電話しました。崎山さんは二つ返事で OK してくださいました。エカフェ国連人権セミナーが 8 月 3 日から 17 日までウランバートルで開催されるので出席するというものでした。木下雪江労働省夫人少年行政監察官が正式代表で、タイから同行した崎山書記官と私は代表代理として出席しました。そして、重要な目的は現地視察で、その際、ウランバートルにある日本人墓地に墓参する許可をもらい、墓地の様子を観察することも重要な任務でした。崎山さんと私にとり重要な関心事は両国関係に穴を空けることでしたが、両国関係については、先方から話しがあれば聞いてくることとして、交渉したりすることはまかりならぬということでした。

8 月 1 日日本を発ち、タイ空港で崎山書記官に合流、ニューデリーでヴィザをとり、モスクワ経由ウランバートルまでアジアからヨーロッパ経由またアジアへの超長旅で出張しました。4 日の朝に到着しましたので、3 日のセミナー開会式には間に合いませんでしたが、4 日以降の実質的セミナーには出席できました。モンゴル始って以来の国際会議で、前年日本で買い付けた同時通訳装置を使用、国連から同時通訳が 6 名ほどきていてアジア

のほとんどの国が参加していました。

このセミナーは婦人中心の『婦人の公的参加』がテーマの会議でしたが、アメリカ2名とインド1名の男性が参加していました。すでに外交関係をもつインドは別として、米と日本は外交関係樹立の可能性を探るというものでした。よく5人で食事しました。米の若いカメンさんとは時にお互いの消息があり、挨拶を交換しました。

会議にはモンゴル国の幹部、とくに著名文学者たちを含む女性幹部は総ざらえで出ばり、会議出席者に連日連夜大サービスでした。事情があってガンダン寺院を見損なったスリランカの女性弁護士とタイの文部大臣と私は別仕立てで参観することになり、私がモンゴル語英語の通訳を務めました。その後文部大臣がタイでたいそうな感動話に仕立ててテレビ放送されたそうです。私事ですが、崎山さんが翌年の私の結婚式でその録音をタイから送ってくださり、サプライズで式場に流してくださったのが忘れられない思い出になりました。

17日の会議修了後、10日間ほど地方視察を含めモンゴル国内の視察をしましたが、その中で1961年の出張者に許されなかった日本人墓地墓参が許されました。そこで滞在中のお礼もかねて、お世話になった方々のうち8名をホテルでの28日夕食会にお招きしたいとおいたら、4名の方々が見えました。ダシツェレン外務省第四局長（儀典局長、兼国連局長）、ツェレンツォードル外務省第2局長（アジア局長）、ワンチンドルジ外務省事務官（英語通訳）、ゴンチグサルダン平和友好諸団体（民間友好団体の総本部、実際は外務省が運営）執行委員会職員の方々です。つまり、まるまるモンゴル外務省だけでした。ダシツェレン局長は儀典であり、今回の国連セミナー招待の事務方トップで、この方は儀礼であると見ました。キモはツェレンツォードル局長でいわば両国関係のカウンター・パートであると考えました。精悍な顔立ちでチンギス・ハーン軍隊の子孫にまぎれもないという印象をもちました。話してみると、頭は鋭利でこの人ある限り、モンゴルは北アジアの地図から消えることあるまいと思われ、しかも、ユーモアとほのかな暖かみさえ感じられ、招来の難しい手強い交渉相手となることが予想されつつも、モンゴル学徒として瞬時にファンになってしまいました。失礼ながら他の方々とはまったく違う、かつてお目にかかったことのない人格の方でした。

最初からモンゴル語のみで会食がはじまり、学習したモンゴル語のみで両国外務省の担当者同士が意見交換していることに感動するとともに、この言葉で話せば、歩み寄りが可能で、良い結果になるとの確信をいたしました。新しいモンゴル語の勉強もしました。モンゴルの格言で、ウソと真実の間には三つの段階があり、ウソの次は耳で聞くこと、その次は目で見ることだそうです。実際にモンゴルを視察したことはいいことだと述べられました。

「ツェ」局長は早速、「わが国は1957年にモンゴル・ソ連共同声明で日本との間に外交関係樹立する用意があることを表明したが、今でもそうである。」とその立場を表明されました。また、「両国は1945年に戦争した（このときはノモンハン事件に言及せず、1945年の戦争のみに言及したのは、ノモンハン事件では停戦協定に調印しているからだと思われます。）。厳密に言えば両国は公式に戦争状態にある。まず平和条約を締結し、国交樹立すべきだという考えだ。」とその立場について説明いただきました。日本側からは「ノモンハン事件の停戦協定をもってモンゴルは日本を承認したか」と確かめたところ、1921

年のモンゴル独立に際し、日本はモンゴルを承認しなかったから、両国間に承認関係はないと承知しているとの回答でありました。そこで日本側から、モンゴルが国連加盟を果たした際（1961年10月）に事実上承認したが、この度のモンゴル訪問でモンゴル側はわれわれに外交査証を付与された。モンゴルの日本承認状態はどうなっているかと質問すると、日本がモンゴルを事実上承認しているのを承知しており、モンゴルも同様、外交査証を付与したのはデファクトに承認したからであると返答されました。その際モンゴル国民は、「日本人民はアジアで高度に発展した立派な国民である」と尊敬しているとも表明されました。そのほかいろいろ情報交換がおこなわれましたが、以上のようなモンゴル側の考えを聞いただけでも来たかいたががあったと思いました。

またイルクーツクには領事館はないが査証を発給する代表部があることも説明してくれましたので、次はそこを利用する方法もありだと思いました。29日にはモンゴル外務省が返礼の招宴を迎賓館でおこないました。きわめて有用な世間話に終始しました。モンゴル側はA A会議に川島自民副総裁が出席するか盛んに気にしていて、もしそうなら、そこで両国関係正常化の交渉を開始しようとの魂胆のようでありました。

日本とモンゴル両国関係の話が両国外務省員によりモンゴル語だけで開始されたのは私にとり感動でした。

(了)